佐岡地区本村における歴史景観の調査
— 屋敷地の変遷から読み解く集落景観の特質 —

池内 克徳[1]　藤原 駿[1]　渡辺 菊眞[2*]　楠瀬 慶太[3]

(受領日：2018 年 5 月 7 日)

[1] 高知工科大学大学院工学研究科社会システム工学コース
〒782–8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185

[2] 高知工科大学システム工学群
〒782–8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185

[3] 高知工科大学地域連携機構
〒782–8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185

[*] E-mail: watanabe.kikuma@kochi-tech.ac.jp

要約：本稿は、香美市土佐山田町の佐岡地区に位置する本村を対象に、その歴史的景観を調査・記録したものである。歴史的景観を構成するものは地形、家屋群、土地利用の様態など、さまざまなものが考えられるが、ここでは屋敷地に焦点を当てて、その変遷から本村の集落景観の特質を読み解く。歴史的景観の読み解きにあたっては 3 種の調査方法を採用している。まずは文献調査による歴史学的調査法であり、次いでは地域の古老を対象に歴史的景観について聞き取りを行う民俗学的調査法、最後に現存する建築を対象に、その空間的特質を現地調査から読み解く建築学的調査法である。一つの領域の集落景観を複合的な手法で読み解くことで、1 視点からでは読み解き得ない総合的・立体的な歴史的景観の考察を目指す。

1. はじめに

高知県の農山村では、住民の高齢化や人口減が進み、集落維持が難しくなっている。今回調査対象とした香美市佐岡地区でも少子高齢化が進行している。2015 年の国勢調査では、地区全体の高齢化率は 45.11 %で、地区内の集落では 50 %を超える限界集落も発生している（表 1）。また、少子化も進み、地域の拠点であった佐岡小学校が 2013 年に休校している。このような中で、本県では集落が持つ地域資源を掘り起こし、いかに活用して地域づくりを図るかが課題となっている。特に、集落に伝わるさまざまな歴史や文化は、地域の発展を支えてきた「地域資源」であり、地域づくりを行う際の材料になると注目されている [1)]。

本稿では、高知工科大学の「里山基盤科学技術の社会実装モデルプロジェクト（通称：佐岡プロジェクト）」の一環で、2017 年度に佐岡地区を歴史的観点から総合的に調査した成果を紹介する。今回は、佐岡地区の中心で戸数も多く、歴史資料も多数残る本村集落を対象に、建築学歴史意匠、日本史、民俗学の分野から集落の成り立ちや屋敷地に着目して研究を行った。

調査研究を通して集落の歴史文化の記録を行うとともに、今後、物部川流域の集落を歴史的観点から総合的に調査する方法論を提示したい。

2. 対象地域の概要

対象地域は高知県香美市土佐山田町佐岡地区の本村である。佐岡は物部川中流域の中では最下流部の右岸に位置する。同地区は本村、佐野、仁井田、大平、中後入、大後入、西後入、有谷、佐竹の 9 つ

表 1. 佐岡地区の高齢化率（2015 年国勢調査）

集落	人口	65 歳以上人口	高齢化率
仁井田	50	29	58.00 %
佐野	186	74	39.78 %
大平	86	34	39.53 %
本村	141	70	49.64 %
佐竹	53	17	32.07 %
有谷	26	19	73.07 %
大後入	21	11	52.38 %
地区全体	563	254	45.11 %

図 1. 土佐山田町佐岡地区本村位置図
（国土地理院発行の航空写真に追記して掲載）

の大字から構成され、そのうち本村は地区の中心を担う領域である。具体的には中世において土居（城）を構える政治的中心があり、近世では行政を担う庄屋が、近代以降には役場や小学校が設置されてきた。本村は 3 つの領域に大別され、地区中央を南北に流れる後入川を挟み、東に「ヒガシ」、西に「ニシ」、「ニシ」南端を画す県道 218 号線より南を「シンデン」という。地区を東西に貫く県道 218 号線沿いに旧小学校、旧役場、旧幼稚園が立地し店舗や店舗跡が立ち並び、「町場」を形成する。地形的な観点から見ると「ニシ」における県道より北は尾根地形の南向き傾斜地であり、その南は物部川を南端とする緩やかな棚田地形を構成するが、その中を後入川が蛇行し、V 字谷断面の不連続線を描く。

3. 調査の概要

3.1 文献調査

まず、日本史学の手法で本村に関する歴史資料や書籍類の収集・整理を行った。歴史資料では、近世初期の土地台帳『長宗我部地検帳』（「山田郷地検帳」）、江戸期の村方文書「森田家文書」（『土佐山田町史料』収録）、地誌『南路志』『土佐州郡志』『皆山集』、明治期の神社記録『高知県神社明細帳』、地誌『高知県香美郡町村誌　佐岡村』、文献では自治体史『土佐山田町史』、佐岡小記念誌『大銀杏のもとで』、民俗誌『土佐山田風土記』などから、本村に関する記載を抜き出して、集落の歴史を検証した。

3.2 ヒアリング調査

続いて、文献に書かれた中世～近現代の本村に関する歴史情報を空間的に把握するため、民俗学の手法で住民にヒアリング調査を行った。調査手法は、九州大学の歴史学研究室が行っている住民の暮らしや生活の記憶を民俗誌として記録する手法 [2] を採用した。既に物部川流域の集落調査 [3] で実施されている手法で、今後他集落との比較検討も可能であることから、聞き取り項目などを踏襲した。

ヒアリング対象は本村在住の 70～90 代の古老 4 人である。対象とした年代は、古老の青壮年期すなわち旧佐岡村（佐岡地区）が旧土佐山田町に合併した 1954 年前後（昭和 30～40 年代）の集落の状況を中心にヒアリング調査を行った。地名や生業、信仰の他に、屋敷地の性格に着目して屋号や生業などを聞き取り、昭和期の本村の景観を復元した。

3.3 現地調査

最後に現地調査をおこなった。本村に現存する民家を対象にそれが古民家（第二次世界大戦以前に建設された民家）か否かを目視により選別し、その空間類型を把握した。空間類型把握においては、屋敷構えを持つ民家と、それ以外を選別した。屋敷構えを持つ民家については、航空写真と現地調査から、屋根伏図を作成し、屋敷を構成する要素（母屋、納屋、倉）を塗り分け、その配置形式や、母屋の向きから、より細分した空間類型化をおこなった。最後に、空間類型ごとに塗り分けした屋根伏図を地図上にプロットし、各類型がどのような分布特性を持つのかを分析した。

4. 歴史資料に見る本村の淵源

4.1 本村の沿革

佐岡は現香美市土佐山田町の大字で、中世には大比良村、西後入村、大後入村、中後入村、有谷村、秋友村、大屋敷村、河内村、遅越村、佐岡村、佐竹村、佐野村、左岡村の 13 カ村で構成された。江戸期には、佐岡村・佐野村・大平村・有谷村・佐竹村・後入村の 6 カ村に集約され、佐岡郷と呼ばれた。明治には 6 カ村が香美郡佐岡村となった。村役場が置

かれた（江戸期の）佐岡村は、村の中心的な集落をあらわす「本村」の名称で呼ばれるようになった。1954 年の町村合併で土佐山田町に編入され、2006 年の 3 町村合併で香美市土佐山田町佐岡となる。

「佐岡」の地名の由来について、土佐山田町文化財調査会『土佐山田町地名解説』は「『（古い資料に）南部にある半坂山を北へ向い越える時は物部川を右に、諸岡陵を左にする故に左岡とせり』とある。村の入口から左側に岡がある地というのである」と記している。片岡雅文氏はこの記述から「南からこの地を見やったとき、右手に物部川が流れ、左手に岡（丘）が広がって集落が形成されている。そのたたずまいを “左の岡”（左岡＝佐岡）と呼んだ」と地名の由来を推測している[4]。

4.2 『長宗我部地検帳』に見る本村

大字・佐岡の中心であった本村集落の詳細を知ることのできる歴史資料が、近世初期に作られた『長宗我部地検帳』（以下『地検帳』、高知城歴史博物館所蔵）である。『地検帳』は、豊臣秀吉が全国で行った「太閤検地」のうち、戦国大名・長宗我部氏が行った検地の土地台帳である。『地検帳』は、太閤検地のうち全国で唯一「一国規模」で残存している検地帳で、土佐の在地支配や住民層、土地開発などを探ることのできる一級史料で、国重要文化財に指定されている。江戸期に土佐を支配した山内氏にも引き継がれ、前近代の土地支配の基礎台帳となった。16 世紀末の『地検帳』を基に本村集落の淵源を探る。本村の検地（土地・家屋調査）は、長宗我部氏の役人ら 9 人によって天正 17（1589）年 1 月 15～17 日の 3 日間行われた。その結果を記した『地検帳』の「山田郷地検帳」から屋敷地の記述をまとめたのが表 2 である。「光蔵坊」という寺を除くと計 23 の屋敷が確認できる。

各屋敷の位置は、聞き取り調査による地名の現地比定が不十分で確定的ではないが、検地の順番や小字などの地名から大まかに推測できる。すなわち、【A 群】物部川沿いの 1 軒（「ヲキノ土居」）、【B 群】「ヒガシ」集落周辺の 11 軒（「カンヌシヤシキ」・「宮ノ前」から「大ヤシ□」）、【C 群】小字「坊」周辺の 4 軒、【D 群】「ニシ」「シンデン」集落周辺の 8 軒、計 4 つのグループで構成されていた（図 2）。注目すべきは、物部川沿いの【A 群】をのぞいた 3 グループはいずれも高台の場所に立地していることである。谷川や物部川の洪水リスクや利水を考慮して集落が形成されたことが伺える。また、現在田畑として利用され家屋のない【C 群】にも屋敷地が広がっていた点も興味深い。

表 2.『地検帳』記載の本村の屋敷地

屋敷名	居住者	規模	注記
カンヌシヤシキ	左衛門五良	上	
ヌキノ土居	源二良	上	
宮ノ前	左衛門五良	中	
クエノ野	奥宮伝兵衛	中	●給人
寺ヤシキ	–	下	妙楽寺待
寺ヤシキ上	川村善兵衛	中	
カヂヤ屋敷	–	下	
カヂヤ屋敷下	西田助兵衛	下	●給人
カジヤ屋敷下	–	下	
カジヤ屋敷西	井上左近左衛門	中	●給人
□□ショウデン	新次郎	下	妙楽寺待
大ヤシ□	甚左衛門	下	
コウクホ	二良左衛門	下々	
ウハカ谷	山本新兵衛	中	
コウクホ	三良五良	中	
光蔵坊寺中	彦三良	上	妙楽寺待
高タヤシキ	北代二良左衛門	中	●給人
ナカヤシキ	五良左衛門	上	
ナカヤシキ南	公文平左衛門	上	●給人
五左衛門ヤシキ	–	下	
北ニノヘイ	御符四良左衛門	下	●給人
御所ノ内	秦泉寺三良兵衛	–	
東ニノヘイ	岩崎久兵衛	上	●給人
御所ノ内東北	神兵衛	中	

※□は欠字

続いて、屋敷の住人に着目して分析してみる。『地検帳』には、屋敷地の項目に全てではないが「～居」と住人の名前が記されている。なお表 2 の「●給人」は長宗我部氏から土地を宛行われている名字を持つ武士層である。計 19 人の名前が確認でき、大坂冬の陣の際に幡多郡中村で反乱を起こした奥宮伝兵衛や、秦泉寺・北代ら長宗我部氏家臣団も居住している。「御所」と書かれた「佐岡土居（佐岡城）」内にも屋敷があり（【C 群】）、武士層が居住している。要害の地でもあった「佐岡土居」には、永禄 2（1559）年から長宗我部氏の一族・広井俊将が居住している。周辺には武士層が居住し、長宗我部氏の物部川流域統治の「軍事」拠点となっていた可能性が高い。

『地検帳』に見える物部川流域の集落（農村）の多くは、古代末～中世初期に集落の開発を進めた

図 2.『地検帳』による本村集落の復元
（国土地理院発行の基盤地図に追記して掲載）

名主層が支配する中世的なムラの形を残している。一方、本村は田畑や寺・神社があり、一般的なムラの要素を備えているが、「佐岡土居」を拠点に武士層が住む「武家町（城下町）」の性格を持つ特殊な集落であった。もとは中世的なムラだったが、戦国期に軍事を担う武士層が居住したことで、政治的に佐岡の中心を担うことになり、その後の本村としての位置が規定されたと言えよう。

4.3 江戸・明治期の本村

江戸期には、佐岡城跡は「一国一城令」によって廃城となり、長宗我部氏配下の武士層もいなくなったことで、本村は「軍事機能」を失い農村化したと推測される。各村には名本、本村（佐岡村）には 6 カ村を統括する庄屋が置かれ、村支配や年貢の収集などを取り仕切った。この時、本村は正式に村政を司る「行政機能」を有したのである。地区に残る神社の棟札には、佐岡村庄屋として森田氏や千屋氏、村上氏らの名前が記されており、庄屋は特定の家の世襲でなかったことが分かる[5]。

物部川を香北・大栃へとさかのぼる韮生往還は、本村とは対岸の物部川左岸側を通ったが、物部川流域の物資流通は川を利用した舟運に依存していたため、川に面した本村もその一翼を担った。舟運や木材の筏輸送の発展は、江戸前期の 17 世紀に野中兼山らによって進められた山田堰の築造、舟入川の開削が起爆材となった。その結果、物部川流域と高知城下が流通によってつながり、多くの山資源が搬出された。

高知城下との物資流通に関する史料として以下のようなものがある。『佐岡文書』には、佐岡村内で伐採した杉・桧 34 本を筏に組み、松・竹、製材した板などともに高知市の新堀川まで運んだ旨を

写真 1. 高知城下屋敷跡出土の荷札木簡
（県埋蔵文化財センター特別展の展示より）

役所に伝えた佐岡村庄屋の「送状」（1570 年）が残されており、佐岡村内から物部川～舟入川を使って高知城下まで木材を搬送した様子が確認できる[6]。また、高知市丸の内の城下町遺跡「高知城伝下屋敷跡」の廃棄土坑 SX13 から「佐岡村長吉」「吉米四斗入」の墨書が書かれた木簡（写真 1）が出土している。伝下屋敷跡は、現在の高知裁判所庁舎の敷地にあたり、幕末に山内氏の別邸があった場所である。調査報告書では、SX13 の年代は 19 世紀に比定され、山内氏別邸に伴う遺構と推測されている[7]。「佐岡村」の荷札木簡は、「吉米」（白米）が佐岡村から高知城下の山内氏の屋敷へと運ばれた際に荷物に付いていたものと推測され、当時山内氏の蔵入地（直轄領）だった村の状況とも一致する。年貢などの物資搬送でも、本村と高知城下を直接結ぶ流通があったことが確認できる。一方、商家や仲買業者の存在など流通機能を担った本村の性格は未検証で、今後佐岡村庄屋を務めた森田家に残る古文書群「森田家文書」（『土佐山田町史料』）などから検討していく必要がある。

明治期に入ると、6 カ村は佐岡村となり、本村に村役場が置かれる。江戸期の庄屋制の流れを踏襲し、本村は引き続き行政的拠点となった。明治 8 年の調査（『高知県香美郡町村誌　佐岡村』）で、本村に村役所（役場）、小学校が確認できる。

商工業については、明治 12 年の調査（『同』）によると、農家 329 戸（耕作・製茶）、工業 7 戸（大工・染工・鍛治・製瓦・木挽き・杣）、商業 42 戸（牛馬商、製糸業、米穀商、製麹、製石灰）、雑業 7 戸（日雇）が佐岡村全体にあった。鍛治や製瓦、米穀商や牛馬商ら商工業を生業とする家は、今回行ったヒアリング調査からも本村に集中していたと推測される。

流通については、明治 14 年の調査（『同』）で、「日本形」と呼ばれる 55 石未満の船が 22 艘、「荷船」11 艘、「渡船」1 艘があったことが確認できる。船を使った高知市中心部との河川による流通網は、昭和前期まで継続されている。上記の多数の船は川に面した本村を拠点にして、近代も継続して舟運による物資搬送が行われた実態を示している。

また、戦国期に本村が有していた「軍事機能」は、太平洋戦争期に復活している。佐岡城跡裏の旧佐岡小学校には日本軍が部隊を置き、1945 年 7 月 22 日には米軍機の空襲を受け、軍人・民間人を含む 11 人が死亡する「佐岡空襲」が発生している。

以上のように、江戸期以降の本村が、農業を中心としながら商工業者も集まる「町場」（江戸時代の農村における小都市『歴史民俗用語辞典』）としての機能を有していたことが歴史資料から確認できた。すなわち、（1）農村（鎌倉・室町期）→（2）農村＋佐岡城跡【軍事】（戦国期）→（3）農村＋武家屋敷【行政・町場】（安土桃山期）→（4）農村＋商家【行政・町場・流通】（江戸期・明治期・大正期・昭和初期）というような集落機能の変遷を追うことができる。

5. 本村の歴史景観を読み解く

5.1 昭和期の本村

前章に引き続いて、1954 年前後の昭和期の「本村」集落の様子を明らかにする。古老へのヒアリング調査をもとに、本村の屋敷地を機能別に分類して集落景観を分析し、古老の生活の記憶から旧佐岡村内で本村が果たした役割やその生活誌を読み解いていく。ヒアリングで明らかになった昭和期の本村集落の景観が図 3（地形（緑）、信仰（紫）、商店（青）、建物（柿）に分類して表示）である。ここでは、集落の構成要素となった屋敷地について、機能別に【行政】【農林業】【商工業】【娯楽】【信仰】の 5 要素に分類して、その記憶を民俗誌的に詳述する。

【行政】「本村」には村役場があり、学校、診療所、警察、郵便局といった行政機能が集中していた。

- 佐岡村役場…現在「佐岡多目的集会所」となっている場所には、旧佐岡村役場があった。隣には「佐岡農協」の建物もあった。行政の中心地であり、明治初期から村政の中心を担った。
- 佐岡保育園…今は閉鎖されている佐岡保育園（佐岡橋東側）は、昭和 20 年代中内清泉村長の時に作られた。もとは県道下にあった。現在は、香美市の施設「移住定住交流センター」となり、NPO 法人「いなかみ」が事務所としている。
- 佐岡小中学校…明治期からあった小学校に併設して、昭和 20 年代前半の学制改革で佐岡中学校ができた。小学校と同じ建物で併設。その後、山田の学校に統合される。
- 佐岡診療所…「佐岡老人憩いの家」がある場所に戦後に医者が常駐する村営診療所ができた。診療所を辞めた後、香北町や県外で開業した医者もいた。
- 駐在所…警察官 1 人がいる駐在所があった。

【農林業】ほとんどの家は農家で、商家も田畑を持って農業に従事していた。炭焼、紙の原料となるカジ・ミツマタの生産、タバコ生産も兼業で行われていた。

- ボサ取り…各自が山に入って雑木を伐り、風呂や炊事に使うボサ（たき物）を取っていた。高知のホテルに売りに行っている人もいた。
- 炭焼…ガス普及前に炊事など家庭に欠かせなかった木炭作りを専業にする家もあった。雑木山を借りて木を伐り、炭窯で木炭を焼いた。
- カジの蒸し場…和紙の材料となる植物「カジ」や紙幣の材料「ミツマタ」の蒸し場があった。カジ・ミツマタを集める仲買の家に、大きな木製の蒸し器を据えた蒸し場があった。仲買人は荷車を馬で引き、物部川奥地にもカジ・ミツマタの買付に行っていた。
- タバコ乾燥場…屋敷に併設してタバコの乾燥場（土蔵）があった。畑で収穫したタバコを薪で火をたいて乾燥させ、山田の八王寺近くの専売公社の「再乾場」と後免の「収納所」に持って売っていた。佐岡村は明治 12 年当時 3 万 1 千斤のタバコを生産する一大産地で、昭和 40 年代まで盛んに作られた。
- 養蚕場…「ヒガシ」に蚕の飼育場があった。大きな屋敷で、多くの蚕を飼っていた。

【商工業】魚屋や酒屋、雑貨屋などの商家、鍛治や石積みなど手工業を生業とする家も多くあった。以下に記した以外にも、美容室、理容室、豆腐店などがあった。

- 魚屋…「花月」という魚屋兼仕出屋がった。高知で魚を買付けて販売した。戦後の物資が少な

い頃は、コブカやメジカ、セキサバ、干物などが売られた。

- 酒屋…焼酎や日本酒の製造・販売をする酒屋があった。焼酎は、愛媛県新居浜から買い付けてきていた。もともと「ニシ」で魚屋が酒屋を兼業していたが、権利を譲り「ヒガシ」に酒屋ができた。
- 雑貨屋・駄菓子屋…「ニシ」に生活用品を売る雑貨屋が2軒、「ヒガシ」にお菓子などを売る駄菓子屋が2軒あった。
- まんじゅう屋…まんじゅうのほか菓子も販売。
- 衣料品店…衣服の販売店。
- 荷車引き…荷車で物資を運ぶ運送業者。
- 博労（ばくろう）…牛の子どもを売り買いする仲買人。
- 採石…物部川のコメガワラから川石を村内の数人が採石し、ワイヤーで仁井田へ上げていた。川石は石垣補修や土木資材として販売した。
- 土取り…ケイトクという田がある場所で、瓦の材料になる粘土質の土が取れた。物部川沿いのニイダマキの船着き場から船で土を出したりもしていた。
- 石積み…「ニシ」に石積み職人の家があり、物部川の川石で棚田の石垣積み、補修もやっていた。
- 鍛冶屋…「ヒガシ」には鍛冶屋が2軒あり、1軒は稲刈り鎌をつくる職人がいた。鞴（ふいご）を使って作った鎌は、周辺集落からも買いに来ていた。もう1軒は「手斧（ちょうな）」を作る鍛冶屋。昭和30年代まで山田の業者に売って北海道へ送っていた。「ニシ」にも2軒あり、「ヒガシ」とは別の刃物を打っており、4軒とも異なる道具を作っていた。
- 建具店…「ヒガシ」にあり、障子やふすまの仕上げ、扉や窓、箪笥を作った。佐岡村内だけでなく、物部川流域で仕事をした。
- 髪結い…（青丸10）「ニシ」に1軒あり、地域の人はみんなここで髪を切っていた。

【娯楽】田舎の娯楽は芝居で、「ヒガシ」にある「養蚕場が芝居小屋として使われた。物部川での川漁も娯楽として楽しまれた。

- 芝居小屋…高知市春野の西畑人形芝居と、どさ回り（地方巡業）の芝居があった。小屋（こや）札と呼ばれる権利（株主入場権）があり、年2、3回の巡業が行われた。幕引きがあるきちんとした芝居で、約10日の巡業の間には続き物も見られた。
- 川漁…物部川では蛇籠に蚕のさなぎに赤土を入れたイダ漁、竹筒を使ったウナギ漁、アユの友掛けも行われた。谷川では小エビ捕りも行われた。

【信仰】神社が各所に散在。氏神の祭りのほか、田の神、祖先神などもまつられた。

- 星神社…本村の氏神。正月と秋にお祭りがあるが、昔は子ども相撲も行われていた。
- 佐岡八幡宮…石清水八幡宮とも。シンデンの佐岡城跡の土塁の上にある神社。正月と秋に祭りをする。
- オサバイ様…田の神さま。ヒガシの県道沿いと佐岡八幡の前にある。「門分（かどわけ）参り」といって、正月にお参りに行く。
- 先祖神…岩崎家、吉川家の屋敷近くに祠がある。吉川家では、お祭りの日には集落内外の親せきが集まっておきゃく（宴会）をしていた。

以上のように、屋敷地を中心にした集落の民俗誌を通して、多様な機能を持った佐岡村の生き生きとした集落の姿が見えてきた。すなわち、「ニシ」集落の県道沿いに商店や役場などの行政機関が立ち並び、「シンデン」集落には学校と家屋敷、「ヒガシ」集落には商店や手工業者の家屋敷が存在する「町場」としての性格を持つ昭和期の集落景観が復元された。複数の歴史資料と比較すると、昭和期の「本村」の集落景観は、規模の大小はあれ、江戸期や明治期にも遡上して考えられるものと言えよう。昭和期には近代以前の物部川の舟運による流通拠点としての性格は失われていたが、さまざま生業の人たちが暮らし、佐岡村内外から物資が集まる場所であったのである。

5.2 町場景観の形成と後退

上記で復元した昭和期の本村集落（図3）から約50年後の平成期の景観を、住宅地図や現地調査をもとに記したのが図4である。昭和期と比べると、行政機関や教育機関、商店、手工業者の屋敷はその性格を失い、「多目的集会所」や「老人憩いの家」「旧佐岡小学校」など佐岡地区の住民が集まる【公共】機能を持った施設に変わっている点が指摘できる。「移住定住交流センター」は、NPO法人「いなかみ」が事務所として使用し、香美市内への移住相談窓口やインターネットサイト「いなかみライフ」での情報発信などを行っている施設で、【行政】機能というより【公共】機能を持った施設と言える。【公共】機能の出現は、「中心」集落として担ってい

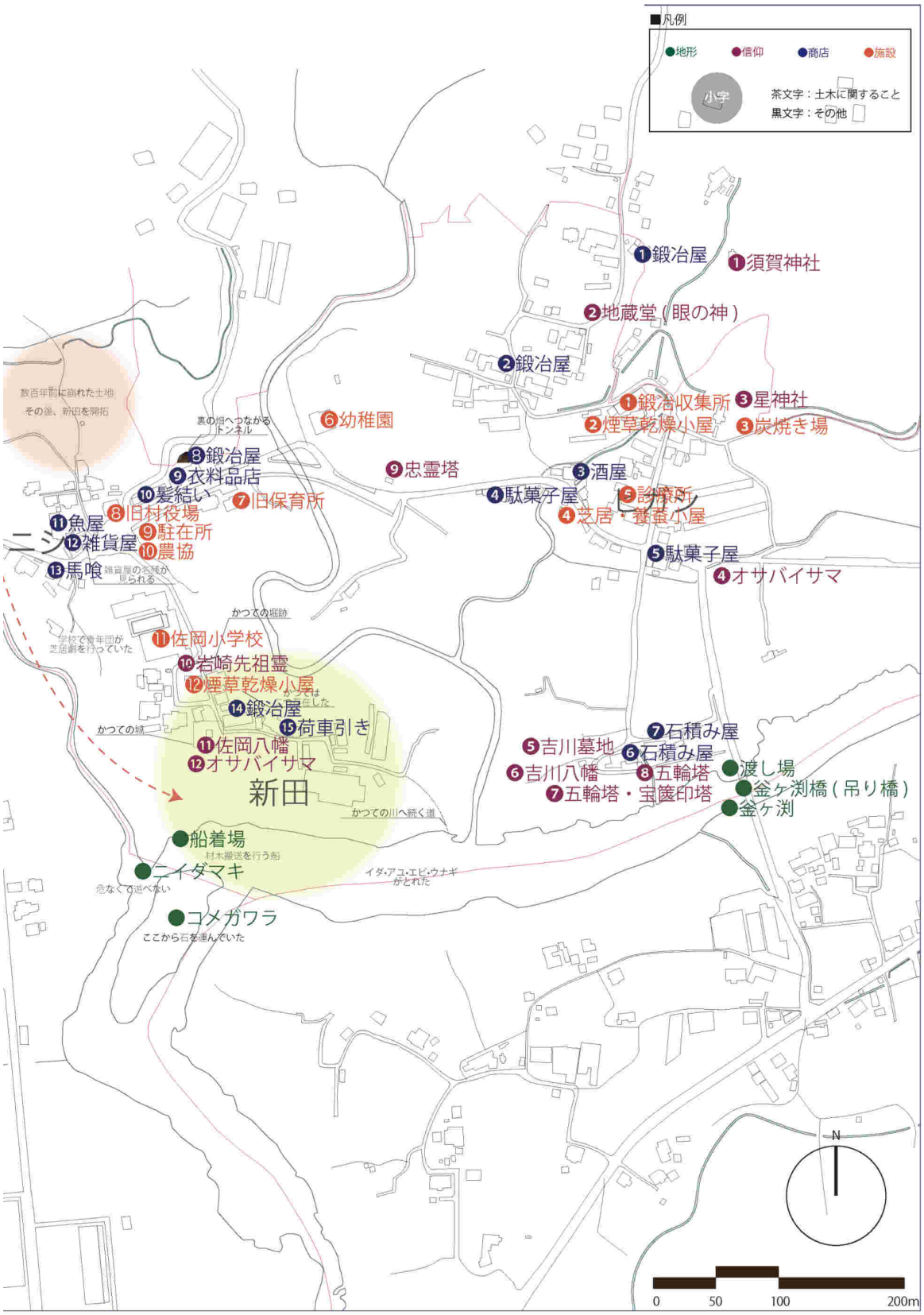

図 3. 民俗誌から復元した昭和期の本村集落

た【行政】機能が町村合併により中心部の山田へ移管し、「本村」が住民自治活動で運営される「周縁」集落へと変わったことが大きい。それに伴い、公民館や高齢者福祉の活動が促進されたことなども上げられる。佐岡小学校も休校により教育機関としての機能は失い、住民の地域活動の場となっている。【信仰】機能は氏神の祭りなど一部が維持されているが、昭和期からは衰退している。空き家も増えたが、過去にさまざまな属性を持っていた屋敷地は、まだその多くが残っている。それらは基本的に地区外で仕事をする人の住宅となっており、農業も兼業が主体となり、農家は少なくなっている。「本村」の集落景観は 50 年でほとんど変わっていないが、商工業者の集まる「町場」（農村の小都市）としての性格は失われたと言えよう。

次に、歴史資料や民俗誌を手掛かりに復元してきた各時代の「本村」の歴史景観をもとに、改めて集落の性格や変遷過程を読み解いていこう。「本村」が他の集落と異なる性格を持つことになった淵源は、前述したように長宗我部の重臣が「佐岡土居（佐岡城跡）」に入った戦国期に求められる。長宗我部の武士層が佐岡土居の周辺に住んだことで、農村の性格を有しながら、武家屋敷が並ぶ「町場」としての性格が付与された。江戸期には、佐岡土居が廃城となって武士層はいなくなったが、佐岡郷 6 カ村を束ねる庄屋が置かれて【行政】機能を有した。村々から年貢が集まる集積地となり、土佐藩との交渉などさまざま行政的手続きを行う拠点にもなったのである。また、物部川の舟運の発展によって「流通拠点」としての機能も有し、商工業者らが住む「町場」が形成されたと推測される。「本村」は、物資の集積地・流通拠点、商工業者の集住などの機能を持ったことで、都市化すなわち「町場」化したのである。この「町場」景観こそ、川に面して山林を背後に持つ立地条件や地区の中心としての歴史などを背景に形作られてきた「本村」の歴史景観の特徴と言えよう。

その性格は、近代以降も継承されたが、昭和後期の町村合併による【行政】機能の後退、河川輸送からトラック輸送への交通網変革による【流通】機能の後退、エネルギー革命による山資源搬出・農林業の衰退による【農業】【商工業】の後退、少子高齢化の進行などによって徐々に【町場】機能を失っていたのである。

6. 本村の古民家の空間類型と分布

本章では、現存する古民家（第二次世界大戦以前に建設された民家）を対象に、その空間的特徴から幾つかの類型化を行い、その分布特性を分析・考察する。また、前章までの歴史・民俗学的考察から導かれた本村の特質と、民家の類型や分布特性がいかなる相関を持つかについても推察したい。

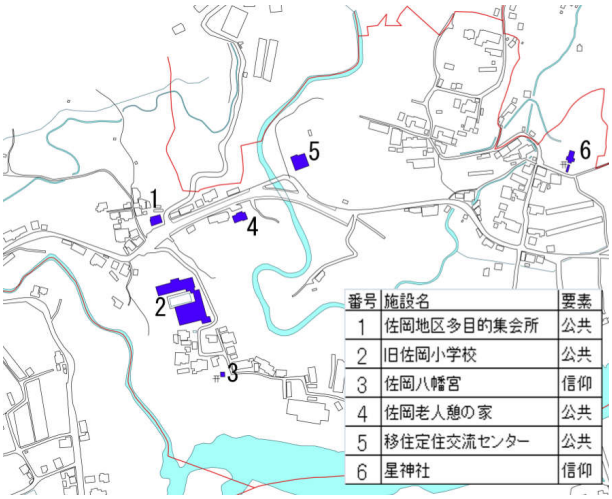

図 4. 本村集落の現況
（国土地理院発行の基盤地図に追記して掲載）

6.1 本村の古民家の類型と分布

本村に現存する民家のうち、第二次世界大戦以前に建設されたものを古民家と位置づけ、その空間的な特徴から、類型化を行った。なお古民家の選定は現地調査により目視にて行った。

屋敷型民家と非屋敷型民家

本村の古民家は大きく二種に大別される。一方は複数の建物が一敷地の中に配列されるものであり、これを屋敷型民家とする。屋敷型民家は母屋、納屋、倉、厠、門塀の 5 つの要素からなる時、屋敷型として完備される。しかし、現存するもので 5 つの要素を完備するものは極めて少ない。そこ最低限、母屋と納屋を備えたものを屋敷型として扱った。もう一方の民家は、屋敷の構えをもたないものであり、複数の棟が結合して 1 軒の家屋となる棟結合型民家と、1 棟の家屋のみで構成される単独型民家の 2 種に細分される。本村では古民家として選別した民家が 22 軒あり、そのうち屋敷型が 16 軒であり、全体の約 73 %を占める。一方、非屋敷型は全体の約 27 %であり、そのうち、棟結合型は 4 軒（全体の 18 %）、単独型は 2 軒（全体の 9 %）である。ここからも本村の古民家は、その多くが屋敷型であることがわかる。

次に各類型の分布を図 5 に示す。屋敷型は「ヒガ

シ」、特に県道 218 号線より北に集中して見られ、その大半を占める。次いで「シンデン」に 3 軒、「ニシ」では 2 軒にとどまる。棟結合型は「ニシ」「ヒガシ」といった集落内での分布特性はなく、その全てが県道沿いにある。ここは昭和期に商業を営んでいた民家が集中して見られる領域であり、純粋農家の典型である屋敷型とは違ったビルディングタイプが要求されたものと推察できる。

屋敷型民家の類型と分布の特性

本村の古民家のうち、その大半を占める屋敷型民家の類型を行い、同時にその分布特性について考察する。

a. 倉を持つ屋敷型民家

上述したように屋敷型民家は最低限、母屋と納屋を備えたものとしているが、その上位（より屋敷型として完備されているもの）として倉を持つものがある。本村で確認した 16 軒の屋敷型民家のうち、倉を持つものは 9 軒あり屋敷型の過半を占める。その分布を図 6 に示す。倉の敷地内配置を簡略化[注 1]して示すと図 7 のようになる。母数が少なく、その傾向の推察は難しいが、母屋と納屋が並列する前面の庭に倉があり、敷地の南西角に位置するもの（＝倉南西型））3 軒（L、O、P）あり、これらは「ニシ」「シンデン」に見られる。一方、母屋・納屋並列前面の庭に倉があり、敷地の南東角に位置するもの (= 倉南東型) も 3 軒あり、これらは「ヒガシ」内に 2 軒（D、E)、「シンデン」に 1 軒（N）存在する。この他に母屋と納屋が並列する正面側の庭ではなく、裏側の北西部に倉を持つものもある（I、J）。これらはそれぞれ、かつては医院、駄菓子屋を営んでおり、純粋農家でない特殊性が屋敷の配列形式に反映されたのではないかと推察できる。

b. 屋敷型民家の配列形式による類型

母屋と納屋の配列形式から類型化すると図 8 のようになる。その分布が図 9 である。並列型、直交型の分布に特性は見られないが、「ヒガシ」の尾根丘陵には、分離型の民家が多く見られる。敷地が広い大規模屋敷が多いことに起因するものと思われる。一方、「シンデン」の民家では結合型が多い。比較的小規模な敷地内での建築配列の結果だと推察できる。

c. 屋敷型民家の母屋・納屋の配列方向類型

母屋正面（母屋の縁側付き大開口がある面）の向きから屋敷型民家を大別すると、16 軒のうち、14 軒が南面し、その大半（88 %）を占める。

次に母屋正面に対して納屋が左右いずれかに位置するのかを確認すると、その全てが母屋左方に位置していることが分かった。母屋正面が南面していない特殊な民家が幾つか確認されたが、その民家においても納屋が左に位置している。このことから、母屋正面に対して納屋が左方に位置するという配列形式が、母屋が南面すること以上に重視されてきたことがうかがえる。しかしながら、その意味については不明であり、今後、改めて調査する必要がある。

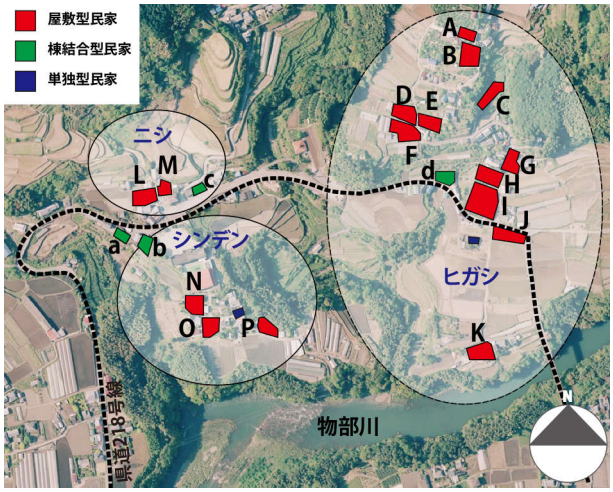

図 5. 本村の古民家の分布

（図 5、6、9 は国土地理院発行の航空写真に追記して掲載）

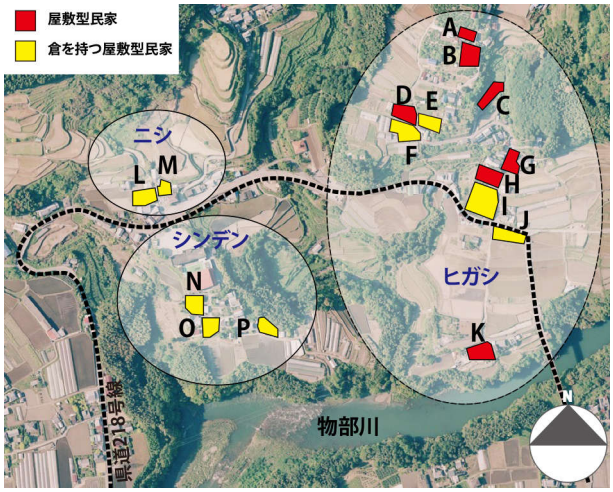

図 6. 本村の屋敷型民家の分布

6.2 本村の古民家の空間特性と歴史景観

本村に現存する古民家において、屋敷型民家が大半を占め、その多くは「ヒガシ」の県道 218 号線の北の領域に集中する。ここは図 2 の B 群領域に一致し、中世において 11 軒の屋敷が見られた領域であり、近世においても庄屋の居住地であった場所であ

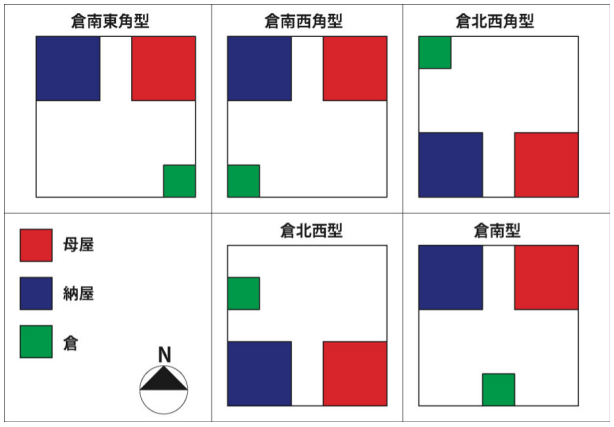

図 7. 屋敷型民家における倉設置位置の類型

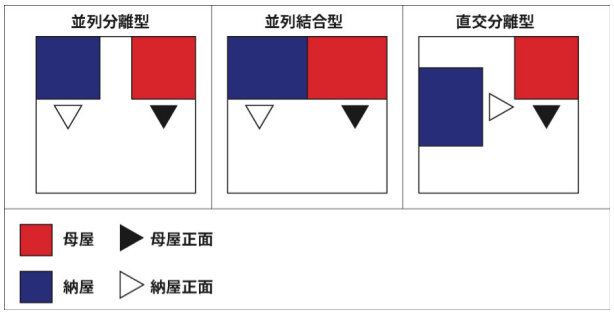

図 8. 屋敷型民家の母屋・納屋配列の類型

る。その一方で屋敷型でない棟結合型民家は県道沿いに多く見られ、町場に立つ建築として純粋農家である屋敷型民家とは違った型のビルディングタイプが要求されたことがうかがえる。また、屋敷型民家でありつつも、倉の位置や母屋と納屋の配列が特殊なものがあるが、これらは県道沿いに見られた。このうち、民家 I は医院を営み、民家 J は駄菓子屋を営んでいたことが確認されている。純粋農家ではない、町場での生業が建築形式に何らかの影響を与えたことが推察できる。

屋敷型民家のうち、比較的規模の小さいものが「シンデン」に見られた。「シンデン」は中世に佐岡城があった城下町（政治的中心）であり、武家の住まいを主に 8 軒の屋敷が見られた場所である。近世ではその名（＝新田）のとおり新田開発された土地である。城跡という土地の制約があること、比較的新規の農村であること、これらのことが現在農家の屋敷規模の大小に影響を与えている可能性はある。今後のさらなる調査が必要であろう。

7. おわりに

本稿では、「本村」という小さな集落の歴史景観を、日本史や民俗学、建築学の視点から総合的に読み解いてきた。その結果、田畑が広がる農村的要素

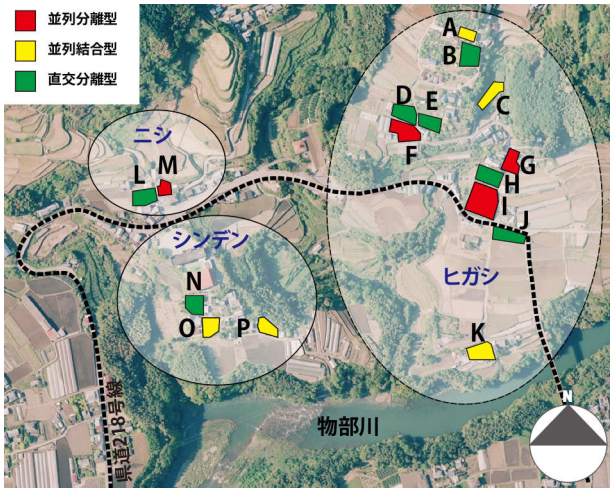

図 9. 屋敷型民家の母屋・納屋配列の類型

を持つ集落が、実は物資流通や商工業で栄えた「町場」でもあったことを明らかにした。その名残は、現在の民家の屋敷構えにも反映されている。具体的には県道沿いの民家に見られる空間形式の特殊性が指摘できよう。また屋敷規模の大小の要因はそれが建設された時代にとどまらず、中世末期や近世の歴史的変遷に起因している可能性も否定できない。

また、「本村」の「町場」として機能は、佐岡地区の他集落や高知市中心部とのモノや人の動きによって相互補完的に機能していた。そこには、「本村」が地域の環境や集落内外のさまざま資源を活用して、どのように発展してきたかを探るヒントがあった。一方で、高度経済成長に伴う生活の変化や少子高齢化によって、集落機能の変貌や地域資源の消失が進んだことも忘れてはならない。

現在「本村」は、住民らによる佐岡地区地域振興推進協議会や高知工科大学の佐岡プロジェクトなどの地域づくり拠点となっている。今後の活動を進める上で、どのような施策が地域づくりに適しているかを探るヒントとして、本稿が明らかにした集落の歴史や景観の変遷を活用してもらいたいと思う。

調査研究の側面では、物部川流域の集落を総合的に調査する際の方法論の一つを提示できた。歴史文献の残る時代（中世・近世・近代）は日本史学で検証し、古老の証言が聞ける時代（近現代）は民俗学の手法によるヒアリング調査を行い、現代の屋敷や景観は建築学的手法によって現地調査するという、複合的調査方法である。各分野だけでは明らかにできない時代的変遷を、総合的調査によって通史的に見ることができたのは重要な成果である。

今回「本村」で明らかにした集落の歴史的変遷は、物部川流域の拠点集落の歴史理解のモデルと

なる事例である。今後、「本村」同様に旧村役場などの行政機能を持ち、流域の流通拠点となった「神母ノ木」「宮ノ口」（旧片地村）、「五百蔵」（旧暁霞村）、「美良布」（旧美良布町）などの拠点集落、「本村」とは異なる機能を持った流域の農村との比較研究へと発展させられる可能性も示した。本稿が、物部川流域の歴史文化や環境、地域振興などを探る一助となれば幸いである。

脚注

（注 1）屋敷構え配置図の簡略化にあたっては敷地規模、形状に関わらず、5×5 のグリッドを持つ正方形を敷地とし、母屋と納屋を 2×2、倉を 1×1 の正方形平面にして配列した。なお方位については真南から東西方向へ 22.5 度ずつの範囲は南とみなした。

文献

1) 楠瀬 慶太, “地域再生の歴史学”, 地方史活動の再構築, 雄山閣, pp. 25–42, 2013.
2) 楠瀬 慶太, “九州大学式地名調査法”, 奥四万十山の調査団編『土佐の地名を歩く』, pp. 17–20, 2018, https://www.shimanto-chimei.com.
3) 楠瀬 慶太, “新韮生槇山風土記”, 花書院, 2008.
4) 片岡 雅文, “土佐地名往来（214）佐岡”, 高知新聞 2007 年 8 月 7 日夕刊.
5) “高知県の地名”, 平凡社, p. 224, 1983.
6) “土佐山田町史”, p. 476, 1979.
7) “高知県埋蔵文化財センター『高知城伝下屋敷跡』”, pp. 33–62・190–196, 2002.
8) 今西 隆男, “佐岡の原風景”, 高知工科大紀要, vol. 14, No. 1, 2017.

Survey on Historical Landscape of Honmura-village in Saoka — Characteristic Aspects of Village Landscape Considered by Transition of Yashiki-chi: Land for Rural Houses —

Katsunori Ikeuchi[1] **Syun Fujiwara**[1]

Kikuma Watanabe[2*] **Keita Kusunose**[3]

(Received: May 7th, 2018)

[1] School of Systems Engineering, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

[2] Infrastructure Systems Engineering Course, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

[3] Research Organization for Regional Alliances, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

[*] E-mail: watanabe.kikuma@kochi-tech.ac.jp

Abstract: The aim of this report is to uncover the characteristics of the Historical Landscape of Honmura village in Saoka. The Historical Landscape consists of various spatial elements, for example; the geography, groups of houses, and scenes of land utilization. However, in this report the authors try to consider the characteristic aspects of the historical landscape of Yashiki-chi, meaning the rural houses and the land used for rural housing. In considering the historical landscape, the authors have adopted three types of surveys. The first is the historical scientific survey used by analyzing old books. The second is the folkloristic survey used by hearing what the old habitants at the site have to say. The third is the architectural scientific survey used by analyzing the spatial quality of the planning site and the types of buildings. This report aims to discover all of the characteristic aspects of the historical landscape by taking a composite survey into consideration.